

付 編

椿市廃寺出土の単弁八弁軒丸瓦

報告でⅠ類とした軒丸瓦は、通常、百済系単弁八弁軒丸瓦と呼ばれている。48点の出土量があり、百済系単弁軒丸瓦を出土する遺跡としては最も出土量の多い遺跡の1つと認めて良いだろう。椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦は、瓦当の中房が弁区より一段高く、蓮弁の先端は尖り気味で強く反転し直立する外縁に一重の圈線をめぐらせている。丸瓦部凸面には斜格子目の叩打を施すが、丸瓦部を残す資料の大部分は叩打痕をすり消している。凹面には竹状模骨が用いられた痕を残しているなどの点をこの軒丸瓦の特徴とすることが出来よう。軒丸瓦出土総点数56点の85%の出土率を占めているから、二重弧文軒平瓦とともにこの寺を代表する軒瓦であることはまちがいない。

報告では、Ⅰ類をa・bと范傷の有無によって分類している。范傷のあるbは、aに比較して間弁の隆起が高くaを彫りなおしたものと考えられる。この傷から、犀川町木山廃寺との同范関係が報告されている⁽¹⁾。小田富士雄氏が周縁が一重圈(Ⅱ類)で、弁の先端が丸く大きく豊満な感覚を盛ったもの(B類)と分類された弥勒神宮寺・垂水廃寺・友枝瓦窯・豊前国分寺などの出土例⁽²⁾の中には椿市廃寺出土の百済系単弁軒丸瓦も含まれており同文瓦と考えて良い。さらに、亀田修一氏は、百済系軒丸瓦の蓮弁の分類のなかで弁端湾曲反転形のB b類に椿市廃寺出土例を組入れて、福六瓦窯・木山廃寺・船迫堂がへり瓦窯・上坂廃寺出土例などを同文瓦とする⁽⁴⁾。これ等の遺跡はいずれも古代豊前地方の寺跡や生産遺跡であり、同范とは限定出来ないまでもかなりの広範囲にこの種の軒丸瓦が用いられている。

九州で出土する百済系単弁瓦は、小田氏が指摘するように畿内地方の百済系軒丸瓦と比べてやや異なった特徴がある⁽³⁾。この文様の特徴から小田氏は九州の百済系単弁瓦の文様を百済末期の様式を受継いだものとし、百済から直接に九州にもたらされたのではなく、いったん畿内を経由したものとされた。さらに、九州の百済系単弁瓦の祖形として飛鳥の坂田寺の軒丸瓦を想定された。その論拠は外縁の重圈文である。(九州の百済系単弁瓦には通常、直立する周縁に重圈文が配置される)畿内で重圈文を周縁に採用する瓦当文様は山田寺式軒丸瓦(641年以降)である。

また、小田氏は、これに先立つ論証のなかで百済系軒丸瓦を出土する22遺跡を紹介し、周縁の重圈文の数で素文縁から三重圈文縁までの4種に唐草文縁を加え5種に分類し、蓮弁の形態を3つに分類した。この周縁の文様と蓮弁の特徴との組合わせと、さらには百済系単弁軒丸瓦と組合う軒平瓦との関係などを基礎とした編年を考えられた⁽²⁾。この編年は『日本書紀』の天智4年(665)の大野城・基肆城の着工記事を上限とするもので、下限を四王寺山出土瓦に置いている。その論拠は宝亀5年(774)、四王寺山に「四天王塼像が安置」(『類聚三代格』)された記事にもとづくもので四王寺山出土例はそれ以降の軒丸瓦とおさえられた。この編年については、大野城跡の発掘調査がその後進んだこともあり、全面的に賛成をすることは出来ないが、今日までの百済系単弁軒丸瓦の年代観の大きな指標とされている。編年表では、椿市廃寺出土例は上坂廃寺・友枝瓦窯・垂水廃寺・相原廃寺・法鏡寺などの出土例とともに710年を前後する時期に置かれている。年代観については、この他に『椿市廃寺』の報告書では、石松好雄氏は7世紀末から8世紀初頭の年代を与えている。これは竹状模骨に関する小田氏の論考⁽⁶⁾に根拠を置いたものである。また、亀田氏は弁端湾

曲反転形（椿市廃寺を含む）の展開する時期を大宰府系古瓦が国分寺造営に伴って展開する以前のものとして7世紀末から8世紀前半の年代を与えた⁽⁴⁾。椿市廃寺出土百済系単弁軒瓦の年代観は、以上のものが代表的なものであろう。（今回の調査でも百済系単弁軒瓦の決定的年代を示す資料は得られていない。）

椿市廃寺の百済系単弁軒瓦は、竹状模骨（花谷浩氏は「側板連結模骨」と呼ぶ。）によって製作された行基式丸瓦をとりつけている。1973年に竹状模骨を発見し⁽⁶⁾、命名した小田氏は、1974年には、法鏡寺・野森瓦窯・山田瓦窯・福六瓦窯にその例を見出し、法鏡寺出土の百済系単弁瓦と竹状模骨の丸瓦が1つの軒丸瓦であることをつきとめた⁽³⁾。以後、この瓦当と丸瓦の関係は、発見例が増加し、1987年の亀田氏の論文では13遺跡を数えている。この時点ですでに竹状模骨と百済系単弁瓦との強い関連性があることは一般的認識となっていた。1995年の花谷浩氏の論文では、九州の竹状模骨丸瓦出土遺跡数は16遺跡が数えられている。

花谷氏は、1991年の飛鳥池遺跡の発掘調査で畿内にも竹状模骨丸瓦が発見されたこと、さらにその後発見例が増加し5遺跡が知られ、播磨にも1例があると報告している。その報告によると畿内で竹状模骨丸瓦を出土する遺跡で、軒丸瓦の丸瓦部がそれであるものは重弁蓮華文軒丸瓦と複弁蓮華文軒丸瓦の二種であり、この軒丸瓦に組合う軒平瓦は三重弧文軒平瓦に限定出来ると言う。さらに竹状模骨丸瓦の使用された時期は、対応する軒丸瓦の年代観と出土遺物の状況から、7世紀中頃に出現し7世紀第4四半期までで終わるものであると言う⁽⁵⁾。このことから、竹状模骨丸瓦を軒丸瓦に用いている九州と畿内との軒丸瓦と、それと組合う軒平瓦の関係でも違いがあることがわかる。さらに、細部では、叩打具の違い、連結される模骨の側板数の違い、綴じ紐の間隔や条数の違いなどが指摘されているが、問題とすべきは、九州と畿内で出土する竹状模骨丸瓦がどのような関連性を想定し得るかと言う点にある。花谷氏は、小田氏が九州の百済系単弁軒丸瓦の祖形として坂田寺出土の5型式をとりあげた見解を妥当なものとする。従って九州の竹状模骨丸瓦は畿内から伝わったもので、天智4年（665）の大野城・基肆城築城が契機となったとする。以上が花谷論文の主要な点である。花谷論文に対しては、竹状模骨丸瓦の成立に関して、那珂遺跡竪穴住居215の竹状模骨丸瓦⁽⁷⁾や、大野城市月ノ浦1号窯の竹状模骨丸瓦があり⁽⁸⁾、その年代観からは、ただちに畿内からの伝播をうなずけない。

本論のねらいは、椿市廃寺出土の百済系単弁軒瓦の位置づけにある。ここまで、椿市廃寺出土の百済系単弁軒瓦のもつ特徴と、それについて今日まで研究者が考えてきた系譜や年代論について紹介してきた。ここで問題なのは、椿市廃寺の百済系単弁軒瓦の生産工房や工人についてである。すでに、この点について亀田氏は、竹状模骨丸瓦と百済系単弁軒瓦の関係は、同一ないし同一系統の瓦工集団の生産品と見ている。椿市廃寺の百済系単弁軒瓦と同範と考えられる資料は少ない。この軒丸瓦は範型に特徴を残さない共通性がある。同文瓦としたもののいくつかには必ず同範瓦を含むものと思う。

この点で、困難はともなうが、椿市廃寺出土の百済系単弁瓦の特徴を、瓦当文様の再検討や胎土分析などの手段によつて的確にまず把握したいものである。出来るならば、椿市廃寺出土の百済系単弁瓦の生産窯が確認され、調査されることが一番この問題の解決に近づく道であろう。瓦当文様が良く似ていながらも、つい最近発掘調査された築城町の「船迫堂がへり窯」⁽⁹⁾で焼かれた百済系単弁瓦は、高尾栄市氏や村上智恵子氏の比較検討結果では微妙な相違があるという。

今後の課題として、豊前地区で出土する百済系単弁瓦の生産遺跡やそれを使用した寺跡からの出土瓦を、より広域的に瓦当文様相互の比較検討や胎土分析などの手段を通じて見極める必要があるものと思う。

椿市廃寺出土の百済系単弁瓦をはじめとする豊前地区の百済系瓦は、北部九州における仏教文化（寺院の建立事業）の初現を知るうえで重要な問題を提起していると考えからである。

（栗原和彦）

註（１）行橋市教育委員会『椿市廃寺』1980

（２）小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究、歴史時代篇』学生社 1977

（３）小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究、歴史時代篇』学生社 1977

（４）亀田修一「豊前の古代寺院跡」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎出版 1987

（５）花谷浩「丸瓦作りの一工夫」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集 同朋舎出版 1995

（６）小田富士雄他『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡 大分県宇佐市における古代寺院の調査』大分県文化財調査報告26輯 1973

（７）『那珂2 那珂遺跡第13次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告第222集 1890

（８）『牛頸月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第39集 1993

（９）高尾栄市『堂がへり窯跡群現地説明会資料』築城町教育委員会 1996